慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 第十七世紀の理想国 クリスチアノポリス |
| Sub Title | |
| Author | 間崎, 万里 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1920 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.1 (1920. 1) ,p.91- 99 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200101-0091 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜　錄

# 第十七世紀の理想國

## 『クリスチアノポリス』

間崎万里

戰爭は平和の母である、否な嚴密にいへば、戰爭の終る處に平和は始まるのである。この平和と戰爭とを交互に連結せる一條の連環は正しく世界歴史の總體をなすのである。されば、治に居て亂を忘れずてふ諺のあると共に、戰亂の世にあつては常に平和が憧憬せられたのも無理ならぬ次第である。實に平和の價値は戰爭によつて高潮せられるのである。かの神聖同盟といひ、國際聯盟といふも、畢竟、大戰役の後に生れ出でたる平和思想に由來して居るのである。

第十七世紀の前半に於て獨逸を荒廢せしめた三十年戰役當時も亦戰爭の殺伐であつた丈けそれ丈け平和を熱望するの情も強かつた。時恰も世界の變轉期ともいふべき科學思想の勃興期にあつたので本戰役に參加せる佛國の一青年デカルトの如きは Cogito, ergo sum. の命題を案出して近世哲學の一生面を開いたのであるが、和蘭の人文學者グロチウスが『和戰法論』を草して國際間の葛藤を平和の裡に解決せんとしたのもこの戰役の間に於てであつた。

この同じ三十年戰役の間にあつて獨逸の一平和論者のものせし一書が今や三百年を隔てたる世界大戰の眞中に於て初めて英語に反譯せられねばならぬ運命にあつたのは強ち不思議ともいへないのである。本書はその出版の當時にあつては、所謂『荒野の叫聲』たるに過ぎないで、其の自國民の間に於てすら何等の反響をも見る事

なくして閑却せられてゐたのであつたが、本書こそは正しく凡ゆる時代に對して訴ふべき人間の理想を書き連ねたる書物の中に加へらるべきものである。即ち本書は Christianopolis（基督教國）と題し、一六一九年 Johann Valentin Andreae の手になつたものである。（註）

（註）本書の英譯は Felix E. Held 教授の手になり牛津大學出版部より刊行せられた。以下紹介せんとするは、獨逸文化史に造詣深きハアヴアード大學名譽教授 Kuno Francke の卽述に據る。

アンドレエ（一五八六―一六五四年在世）は反宗教改革の時代及び三十年戰役當時の獨逸に於て數多からぬ宏量なる人々の一人であつて、異宗派に對する些細なる嫉妬や狂熱的なる憎惡の上に超越し、自からは熱心なるルーテル派の信徒なりしも、瑞西のジュネーヴ市に久しく滯在せる間にカルヴァン派の宗教制度の社會的道德的效果に痛く感嘆するに至つた。彼は鄕國に對する愛着の念深かりしも、又廣大無邊なる國際的同情を有してゐた。彼は實際に所謂『ローゼンクロイツ同胞團』の創立者の一人であつて、國際的學術研究と全文明世界の『總改革』とを盛んに唱道したる人であつた。彼は神學者として且つバイブルの研究者として深奥なる知識を有してゐたのであつたが、同時に又世情にも通じ實務の才をも兼ね備へてゐた。第十七世紀の二十年代及び三十年代に亘つてウェルテンベルヒのカルヴ（Kalw）の町に牧師の職を奉じてゐた間に彼は同町の染織業に從事せる勞働者の共濟組合を設立した。この團體は今日も尙ほ存續して相當の資金を有し繁昌してゐる。

彼も亦三十年戰役の慘害を免れ得なかつた。カルヴの町が一六三四年と其の四年後と兩度の掠奪を蒙りたる際、彼は金錢上及び土地の損害はいふ迄もなく、特に彼の私有にかゝる貴重なる寫本、繪畫及び其他の美術品の蒐集が破壞せられたるため著しく損害を蒙つた。一六三九年には宮廷附牧師兼宗教法院議員としてスツットガルト市に招聘せられ、此地にあつて、數十年間の絕え間なき戰爭によつて荒廢無秩序に陷れる公國全般の宗教上及び教育上の制度を再興せんがために餘生の大半を擧げて之に費した。人間の中に存する凡ゆる最善の平和的發展を目指せる理想國の記事である『クリスチアノポリス』の出版は、獨逸の地域に戰はれたる戰爭中の最も破壞的なるこの戰役の初と合致してゐる、而して理性の生活といふものは物質的事實の重量に全然支配せられるものでなく、殘忍なる强力と盲目的不合理の時代に於て一層その長所を發揮するものであるといふ信仰を本書の中に確認することを欲せぬものは、この偶然の合致は人の運命の殘酷なる嘲弄とも見ゆるであらう。

第十六・七世紀の理想的國家の中、本書は是迄與へられたる以上に重要なる地位を受くべきものである。想像力と藝術的完美の點に於てはそのモデルである英のトマス・モーアの『ユトーピヤ』（註）及び伊のカンパネラの『シヴィタス・ソリス』（太陽國）には及ばぬけれども、この官能美の不足は人性の目的の高尙なる精神によつて補はれてゐる。この精神は巧利本位より打算して奴隸を是認してゐる『ユトーピヤ』よりも、結婚を以て繁殖制度たるに過ぎずとせる『太陽國』よりもこの新教徒の同胞的國家を一段重からしむるものである。何となればアンドレエは英伊兩先輩の畫ける社會の基礎をなす共產主義的原理を採用せるも、彼は決して個人の生命を公共の利益のために犧牲とせず、その反對に各個人を、能率と美德と幸福の一段高き程度に向上せ

しむる事に重きを置きしが故である。

（註）詳しくは、De Optimo Reipublicae Insula Utopia, 1516. 本誌昨年四月號より六月號に亘れる高橋教授の嚴密なる批評を見よ。

其の序文にも示せる如く、彼はルーテルによつて激成せられたる眞理のための大反抗が彼自らの時代に於て停止狀態となり、『僞善が宗教の地位を、暴政が官憲の地位を、遁辭が文學の地位を簒奪したりと深く感じた、そしてその鄕國に於て見出し得なかつた處のもの—即ち眞の人間を、遠き海の彼岸に見出さんことを望みつゝ、壓迫と詭辯と獨斷とを離れて進み行く『夢想丸』の乘客であると彼自らを述べてゐるのは單なる文學上の幻想たるに止まらない。彼は難船に出遭ひ、船員には溺死したるも、四散したるもある。彼自らはながらく怒濤の中に漂流したる後、最後に一小島に運び行かれた、そして其地は一大亡命者となれる宗教が數百の信徒と共に敵の世界の迫害を受くるの憂なき避難所を發見せるの地となつてゐる。これが『クリスチアノポリス』である。此處に不和の社會を離脫し來れる亡命者が平和に滿ちた幸福なる生活に入るのである。

この理想國の記事の特色と見做すべきは終始一貫して自由なそして立派な人道的訓練を施こす事を目的とせる制度と組織が力說せられてゐる事である。

その政治的憲法は『ユトーピヤ』に見る如く選擧王國でも、又『太陽國』に見る如く共產主義的階級政治でもなく、精神上の民主的貴族政治であつて、カルヴァン派の基礎の上に立つジュネーヴの團體生活に近きものである。而して『クリスチアノポリス』に於ける公私の生活についての一切の協定及び命令はこの精神上の貴族政治を助長促進せしむる一つの目的を有し、社會組織の基礎は產業上の國民强制服役制度ともいふべきものである。この基礎の上に國民的勞働を再建せんと目下試みつゝある獨逸の經濟學者にしても、ウィリヤム・ジェームスにしても、第十七世紀のこの人が彼等の思想に先鞭をつけたる事に驚かされたであらう。彼は曰ふ『各市民が自己の地位と階級とに應じて辯舌を以てするのみならず筋肉を使用して彼の最上の努力を共和國に對して盡すべき義務を負へる事を誰か否み得るものぞ』と。世間の俗人達は優美の意味を誤解して土や水や石や石炭や、この種のものに觸るゝを厭へども、その身を慰めんが爲に馬や犬や娼婦や、この種の生き物を所有するとを偉いと思つてゐる。』然るに『クリスチアノポリス』の市民は之と趣を異にしてゐる。『彼等の紋章には獰猛と華美の道具ではなくて人道と事業の道具を象徵として附してゐる。そして或る公の義務は例へば見張り番や守衛や穀物の取入や葡萄酒の製造より道路工事、建築工事、排水工事、工場勞働等の如きに至るまで萬人に對して平等に課せられる。』但し是等の勞働に協同する事は『年齡及び男女の別に從ひて』順番に行はれ、そして各個人は『頻繁に或は長時に』使用せられる事はない。勞働の時間は短かく、且つ長短一ならざる休業期間が度々挿入せられてゐる。蓋し『吾人が成る丈け繁く已に立ち歸りて浮世の俗塵を打ち拂ひ人道のために盡さんとする決心を吾人の精神に塡充し、疲勞せる精神機能を復活し、且つ吾々の機智を鋭敏にする事が最も大切』なるが故である。其の結果として、健實なる敎育が少數の人丈けに止まらず、職人や勞働者の多數のものに施され、彼等のすべては元氣よく其の業務につき、其の仕事よりして愉

快を感ずる。何となれば『彼等は慣れざる仕事に野獸の群の如くに追ひやらるゝ事なく、前以て科學的事項に關しての正確なる知識を仕込まれ』之を應用するに當つては『愉快の念を生ずる』が故である。而して町全體は最も自由なそして最も多樣なる活動を開展せしむる『一つの大なる仕事場』の如き觀を呈してゐる。

然るにこの社會の『最も尊き聖殿』は學校である。この學校こそは『宗教と正義と學問が此處より全社會を支配すべき中樞』である。而してこの學校に行はるゝ教育の方法及び人生に對する見解は眞に精神の自由にして開明なる點に於てアンドレエが如何に時世より進んでゐたかを頗る明瞭に示してゐる。讀んで益なき書上の學問は此處にては教へられず、文法家の穿鑿的術學は論理學者の虛飾的知識と共にその固有の範圍内に追ひ込まれ、學生は死せる形式を求むる事なく活ける人生の意義を十分に會得せしめらる。殊に彼等は成る丈け速かに自然科學の實驗的方法を教へらる、蓋し自然科學は宇宙の神秘を闡明するの助となるが故である。この自然科學を通じて『物體は何で出來てゐるか、その形式と質量、空間と時間は如何であるか、天體は如何にして運動し如何にして出現するか、元素は如何にして混合し如何にして增加するか、動植物は何のために存在するか、金屬は何に使用せられるか、吾人の心内に存する神性の閃きである精靈は特に何を完成するかを吾人は知るのである。事實是等はすべて見事なものである。之を知らざるは人間の恥である』と。自己の身體の内部及び外界に生息するものが何であるかについて思慮を費やす處なく、空の空なる抽象と規則の紛雜の中に踏み迷へる舊派の賢人の魯鈍さよ。そして物理・化學に於て、幾何學・解剖學に於て、果た天文學に於て完全なる教育を受けて自己の器官とその機能に關し、且つ地球及び其他すべての恒星上の生死を支配せる大法則に關して明快なる理解を有する『クリスチアノポリス』の學生が是等舊派の賢人に比して優れる事よ。當時愛好せられし學問なる占星學について言へば、アンドレエはその研究について頗る遠慮勝なる意見を吐露してゐるが、正にこの遠慮勝なる點に於て彼の道德的標準の洗練せられしことを示してゐる。彼は曰く、『占星學は幾多の理由よりして非常に重視されてゐるとはいへ、本問題について彼等が予に語れるとき、予は「クリスチアノポリス」の住民の之に關しての意向が實際如何であるかを理解し得なかつた。兎に角、彼等が一切の事物を出生と存在の最初の瞬間に依從せしめ、その瞬間によつて生死についての判斷を下す事は危險な事であると言ふのである。それ故、彼等は寧ろ占星學中の、如何にして星を支配すべきや、そして若しありとせばその羈絆を如何にして脱すべきやの方面を力說してゐる』と。

かく自然科學に對して重きが置かれたるにも拘らず、人文科學は『クリスチアノポリス』の學科課程表中に於て決して等閑に附せられなかつた。而して此處にも又眞に生命のあるもの生命を維持してゐるものについての研究に重きが置かれてゐる。語學の研究にあつては文法的規則よりも單語が非常に重きをなし（註一）、近代語も古代語も主として他の民族の思想に接觸する事によつて知識の領域を擴大するの手段として尊重せられ、修辭學にあつては陳套なる語句や美文を積み重ねて模倣を事とするが如きは無用の事にして稚氣に類すとて非難せられた。『此處に必要なるは飾り氣なき生得の感覺である。技

巧を弄せる傾あるものは無力であらう。誠實に簡單にそして眞情を以て語るならばキケロの雄辯をも後に瞠若たらしむ。』と記せるは、『智慧があつて切實な議論をするのなら、技巧を弄せないでも演說は獨りで出來る』（註二）と言へる『ファウスト』の先縱なるかの如き思ひがする。『人間の悲劇的なる事件の（大なる）解釋者』である歷史について、アンドレエは特に力强き言葉を見出した。『惡魔の橫暴、罪惡の生長、人間の醜惡なる行爲、戰爭の畏怖、殺害の恐怖、自慢の廣告、富力の倨傲、階級の混同、兇行の隱蔽などの行はれた數千年を回想するは悼しい事である。すべて是等の狀態は世界に相次いで續起し頻繁に發生し全時代を混亂せしむる。之と反對に神の選手、人の精靈の威嚴、德の大本、克服し難き神聖の力などを瞑想するは大に慰みとすべきである。』この『クリスチアノポリス』の武庫に武器を蒐藏せる事について吾人の耳にする處は又よくこの精神的狀態と調和してゐる。『世間では殺人器械、弩砲、其他の軍器武具に特別の光榮を認むるも、「クリスチアノポリス」の人民はかゝる一切の殺人器械を見て戰慄するのである。彼等は是等の武器を多量に蒐藏してゐる。こは訪問者に對して人生の殘忍に對する警告として之を示すのみならず、死其者が吾人の間近に殺到しつゝあるに尙ほ死を工夫せんがために幾多の技術が浪費せられつゝあること、之に向はゞ自から戰慄するやうな危險を最も親しき同胞の上に齎さんとすること、而して凡て是等の暴行は絕對的に全然無價値のものを得んがために使用されつゝあることを彼等が是認せざることの證據として之を示すのである。

（註一）They (Humanists) increased vocabulary, and with it the national mind. Few words mean few iden, and vocabulary is a fairly safe index of a country's intellectual outlook. The Renaissance by Edith Sichel, p. 12. 以て本說の必しも排すべきに非ざるを知れ。

（註二）森林太郎氏譯「ファウスト」第一部五六頁による。

人生に價値を加へること、各個人の生命を自己のためにも社會のためにも尊重せしむること人生を有效に幸福に且つ美化すること、――要するに、是れ『クリスチアノポリス』の全制度の目的である。是等最高の奉獻をば是等の制度は美術により、音樂により、宗敎によつて受け入れるのである。彫刻と繪畫の敎育的效果は『百聞は一見に如かず』とか『外形の美は內部の美德を生む』てふ金言によつても知られる。『僅の音調を以てしても無限の諧音を生せしむる』音樂は『吾人を天國に向上せしむる豫言的精神と滿腔の調和』を有するものである。されば『クリスチアノポリス』は幸福である。此處には偉人の繪畫と彫刻とは隨所の公の場所に飾られ、琵琶やヴァイオリンや竪琴や橫笛の美音は家々に響き渡り、少なくも一週に一回この町の靑年の合唱隊が嚴肅なる天使の如き歌を唱へつゝ街路を步み行く。眼眸の向ふ所一として淸潔なる住居と美麗なる庭園、日當りよき中庭と淸澄なる泉水とならざるはなく、到る處に友誼的なそして滿悅せる容貌が見受けられる。――是れ實に威嚇し呪咀する事なくして、敎育を施し向上せしむる宗敎の生ける證據であつて、そして共有の制度と公平なる分配とによつて世界の財寶をこゝに住むものすべての幸福の源泉とするのである。